震災発生時における匿名電子掲示板への信頼

—東日本大震災前後の比較—

○都築誉史¹・菊地学¹・千葉元気²・相馬正史²・橋本雄一²（非会員）

（¹立教大学現代心理学部・²立教大学大学院現代心理学研究科）

キーワード：震災，信頼，CMC

Trust of anonymous BBS in earthquake disaster

Takashi TSUZUKI¹, Manabu KIKUCHI¹, Itsuki CHIBA², Masashi SOMA² and Yuichi HASHIMOTO²

(¹Rikkyo University, ²Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University)

Key Words: disaster, trust, CMC

目 的

中谷内・Cvetkovich (2008) によれば，調査対象者の関心が高い場合には，主要価値類似性モデル (salient value similarity model) にしたがって，自分の主観的価値観と類似した価値観をもつと認知した相手に対して信頼感が形成される。一方，CMC (computer-mediated communication) において，従来のコミュニケーションとは異なる特徴が幾つか見出されている (木村・都築，1998；都築他，2005)。さらに，2011 年 3 月に発生した東日本大震災とそれをめぐる多量の情報は，我々のリスク認知，情報源への信頼度，信頼感形成に影響を及ぼした可能性がある。

本研究は，震災の映像を提示することによって調査対象者の関与を高め，インターネット上の匿名情報（書き込み）への信頼度が SVS モデルの予測と合致しているかを，東日本大震災の前後で，ほぼ同質の大学生を対象者として探索的に検討することを目的とした。

方 法

調査対象者 大震災前の調査 (2010 年 11 月実施) は，立教大学学生 100 名 (男性 31 名，女性 63 名，平均年齢 (SD) は 18.94 歳 (0.84))，大震災後の調査 (2011 年 9 月実施) は，立教大学学生 150 名 (男性 55 名，女性 95 名，平均年齢 (SD) は 18.60 歳 (0.66)) であった。

刺激材料・質問紙の構成 地震発生時の匿名情報 (約 130 文字) を 2 種類作成し，映像刺激として，YouTube より“ハイチ大地震”ニュース映像の冒頭 2 分間を用いた。上記匿名情報に対し，中谷内・Cvetkovich (2008) の質問項目をふまえ，情報発信者に対し，災害に関する価値観の類似性，インターネット利用における価値観の類似性，能力の評価，公正さの評価について回答を求めた。さらに，情報に対する関心，類似した災害に対する情動 (恐怖感，危機感) や，災害の頻度認知 (多数発生しているか，自分の周囲で発生しているか) に回答を求め (以上 9 項目は，5 段階評価)，情報に対する信頼度 (どのくらいの確率で真実であると思うか) を評価させた (0–100%：11 段階)。インターネットの利用状況については，パソコン，携帯電話，スマートフォンに分けて，1 週間当たりの利用日数と，利用する日の利用時間 (時間，分) を回答させた (3 分類した調査は大震災後調査のみであった)。

手続き 最初に，9 種類の情報源に対する信頼の程度を，5 段階評価で回答を求めた (大震災後調査のみ)。次に，地震発生時の匿名情報を示し，その情報に対して 10 項目に回答させた。その後，“ハイチ大地震”ニュース映像を提示した上で，再び，別の匿名情報を示し，それに対して同一の 10 項目による回答を求めた。最後に，インターネット利用状況に関する質問を設定した。なお，2 種類の匿名情報の提示順序をカウンターバランスして，2 種類の調査票を用いた。

結 果

情報源の信頼度 大震災後の調査において，災害における情報源の信頼度 (平均 (SD)) は，降順で，新聞 (3.68 (0.08))，大学・研究所 HP (3.60 (0.07))，専門家による説明 (3.54 (0.07))，行政 HP (3.24 (0.09))，テレビニュース (3.21 (0.09))，政府担当者の記者会見 (2.72 (0.09))，一般市民 HP (2.30 (0.08))，週刊誌 (2.21 (0.08))，ネット上の掲示板への書き込み (匿名) (2.00 (0.09)) であった。電子掲示板情報の信頼度は最低であり，分散分析 ($F(8, 1152) = 81.75, p < .001$) と多重比較 (Bonferroni 法) の結果，次に信頼度が低い週刊誌以外の 7 種類の情報源との差が有意であった ($ps < .05$)。

信頼と関連する項目：大震災前後の比較 本稿では，大地震ニュース映像を提示した後の評価結果に限定して報告する。“災害に対する情動”と“災害の頻度認知”における α 係数は順に，.85，.68 であった。

大震災前後で比較した結果，大震災後の方が大震災前よりも，“情報への関心”の平均値が有意に低く (平均 (SD)：4.03 (0.78)，3.83 (1.14)， $t = -1.56, df = 248, p < .001$)，“能力評価” (平均 (SD)：3.31 (1.02)，2.93 (1.04)) と“災害に対する情動” (平均 (SD)：4.08 (0.82)，3.80 (0.95)) において，大震災後の平均値が低い傾向が示された ($ps < .10$)。パソコンによるインターネット利用時間 (1 日平均) の平均 (SD) は，大震災前，大震災後の順に，1.33 (1.22)，1.13 (1.16) であり，大震災後の携帯電話，スマートフォンによるネット利用時間の平均 (SD) は，1.05 (1.58)，0.69 (1.32) であった。

重回帰分析 1. **大震災前** 7 項目を説明変数とし，信頼度を目的変数とする重回帰分析の結果，決定係数は .44 で有意であり ($F(7, 92) = 10.19, p < .001$)，“能力評価”からの偏重回帰係数のみが有意であった ($\beta = .32, p < .001$)。

2. **大震災後** 同様の分析の結果，決定係数は .34 で有意であった ($F(7, 142) = 10.65, p < .001$)。“インターネット価値観・類似性”と“情報への関心”からの偏重回帰係数が有意であり ($\beta = .19, p < .05; \beta = .15, p < .05$)，“災害に対する情動”からの偏重回帰係数で有意傾向が示された ($\beta = .16, p < .10$)。

考 察

調査時における震災ニュース映像の提示だけではなく，東日本大震災の生起と多量の情報を経験したことにより，調査対象者の震災に対する関与度が高まり，大震災後では信頼度が最低である匿名電子掲示板情報を評価する際にも，SVS モデルを支持する結果が得られたと解釈できる。

引用文献

木村・都築 (1998). 実験社会心理学研究, **38**, 183–192.
中谷内・Cvetkovich (2008). 社会心理学研究, **23**, 259–268.
都築・木村・松井 (2005). 立教大学心理学研究, **47**, 25–34.

注) 著者の指導のもとに 2010 年に調査を実施した石坂圭さん (2010 年度立教大学心理学科卒) に感謝いたします。